

井上宗雄

中世教壇史の研究

風
月
書
房

中世歌壇史の研究 室町前期

定価 一三、〇〇〇円

著者 井上宗雄

発行者 風間務

印刷者 中内康児

発行所

株式会社 風間書房

101 東京都千代田区神田神保町一の三四

電話東京(二九二)五七二九番

振替東京一八五三番

☆落丁本・乱丁本はお取替いたします

昭和36年12月10日 初版発行
昭和59年6月30日 改訂版発行

(晚印刷・有朋製本)

ISBN4-7599-0606-1

序

井上宗雄君が「中世歌壇史の研究(室町前期)」を出版されるといふ。うれしいことだ。これは、世間一般にいふ中世和歌史の研究ではなく、南北朝合鉢の応永期にはじまり、永享・文安宝徳・寛正・文明期までの十四世紀の約百年間にわたる、中世歌壇の史的展開のあとを詳述されたものである。

君は早稲田大学の新制大学院の第一期卒業であるから、まだ少壮の研究家である。しかしその仕事は、全国的に博搜された資料を相互に比較考証し、調査整理して、それを史的展開のうへに浮彫されたもので、貪欲な博搜と入念な調査努力とは、文句なしに頭のさがる思ひがする。若いうちでなければ、できない作業である。

いままで中世和歌の研究が決してなかつたわけではない。しかし今までの研究の多くは作家の個人研究の集成か、でなければ作品と作品との比較研究でしかなかった。本書は、さうした個人的な作家研究でも、その比較でもない。まづ個別的に作家活動を克明に調査したうへで、それらの活動を時代の流れに置いて、一つの集团的な動きや交流、即ち歌壇の変遷を闡明しようとしたものである。ある人はいふ、井上氏の論述はいつも文学以前で終つてゐると。さうかもしれない。しかし一体、文学といふものを、われ／＼はたして純粹にそして客観的に抽出し、それを厳正に批判し論評することができるものだらうか。たとへば、了俊の文学論を抽出し論述したとする。それがたして純粹に客観的な了俊の文学であらうか。了俊その人から離れて決してあるものでないことは自明なことである。評論しえたと思ふ文学論は、あくまでもその評論家をとほして、その人なりに抽出した文学論であり、その人個人の人間的な

投影にすぎない。井上君の了俊観は、勿論彼なりに形成されてゐるにちがひない。いますぐ、それを發表し結論づけることは、恐らく彼自身の氣持がゆるさないのであらう。客観的な厳正さを期するためにも、君自身いま暫くあたためて、もつと時間と彼の人間的育成とが必要なのかもしれない。事実また、さうした文学論、作家論にしても、かうした人の氣をひかない地道な基礎調査がなければ、できない相談なのだ。そしてこんな作業が誰にでもできるとは限らないのだ。又このやうな仕事は、中世の文学を研究しようとするものには、必ずいつかは誰かが一度はしなければならぬ課題であり、基礎的作業なのである。それを彼が自ら買つてでたことは貴重な業績でなければならぬ。もしもそれを誰にでもできる仕事だといつて笑ふものがあるとしたら、活字本しかよめない学者先生氣取りの淺薄な印象批評か、自己陶醉の独善に陥入るほかない人達であらう。又いままで井上君の育つた環境は必ずしもこのやうな作業に最適などころではなかつたやうだ。それを彼はあへて敢行したのである。

本書のうち、とくに著しいと思はれることは、室町前期の禁裏、幕府等の公武間に行はれた月次、点取、著到、統歌御会等における龐大な和歌群の整理であり、また纂集異本の調査、または「為家卿和歌書」「一禪御説」「歌林」等の発掘であり、一方には義尚歌壇の東山文化形成への史的意義や兼良歌学の系統、正徹の新統古今撰集當時の立場、東常縁の歌壇的評価の解明など、鮮烈なものがある。又この井上君の仕事には、百冊以上におよぶ彼のメモの整理その他、書道にすぐれた令夫人英子さんの蔭からの助力があつたといふことを聞いたが、これをこゝに一言注しておきたい。

昭和三十六年十一月三日夜

は し が き

序章において鎌倉時代・南北朝時代の歌壇史を素描し、第一章から第八章までは、明徳末から長享・延徳に至るはば一世紀の歌壇を、八期に分けて叙述する。資料に即して述べる事を原則とし、典拠はいちいち記すようにつとめた。但し記事が煩雑冗長となるのを少しでも抑えようとした為、類出する書名には略称を用いた場合がある。

日記類における公・卿などの字は原則として省き（例 後法興院記↓政家公記↓政家記、満済准后日記↓満済日記）、一般に略して通用している書、そのほか略称を用いたものがある（例 群書類従↓類従、弘文荘待賈古書目↓弘文荘書目、釈教歌詠全集↓釈教歌詠、大日本歌書綜覧↓歌書綜覧、図書寮典籍解題↓図書寮典籍）。なお文庫名もそれにならった（例 静嘉堂文庫↓静嘉堂）。また先学の業績を引く場合に敬語法を略した所が多いが、非礼を御寛恕をいただきたい。

付録として堯孝・東常縁年譜、室町前期私家集伝本書目、各家・各派系図を掲げたが、粗雑で、草稿の譌りは免れ難いと思うが、将来の研究に一応の目安となれば幸いである。

再版にあたって

初版刊行以来二十余年を経過し、研究がさまざまに積み重ねられ、新資料も多く出現したので、それらの補足を中心として、主として研究史的側面からの記述を加えた。

1、比較的短かく書ける所は、本文の段落区分に〔注〕と記し、後ろの「補注」の中に、本文の頁順に列記した。
2、やや改訂が長文になる所は、「補説」として、中に節をたてて叙述した。本文には、「この章（節）」に関しては補説参照」のように記した。

3、室町前期の歌合・歌会の類で、作品が（主として書物の形で）まとまって残存するものを集めて、「室町前期歌書伝本書目稿」として加えた。歌合など伝本を網羅していないものもあるが、『室町後期』に倣って敢て付してみた。本文に〔書目稿参照〕とあるのはこれを示す。

4、その他。原則として序章は補注・補説等を加えなかった。また本文の誤植・誤記はできるだけ訂した。本文中に今回補訂を加えた場合は原則として「」に入れた。

5、拙著『中世歌壇史の研究南北朝』は『南北朝期』、『中世歌壇史の研究室町後期』は『室町後期』のように略した。『図書寮叢刊後崇光院歌合詠草類』を『叢刊』（後崇光院）のように略記したものもある。また『私家集大成』における家集の系統については、それが幾類かを通して同じ名で、著名な場合、家集名にⅠⅡ等（例えば沙玉集ⅠⅡⅢ）を付して示したものがあつた。逆に個人名に集Ⅰなどを付した（例えば雅世集Ⅰ）場合もある。なお原則として私家集大成番号を付した。

6、その他、それぞれの凡例を参照されたい。

昭和五十八年十月十日

目次

はしがき	一
序章	九
第一章 応永初期の歌壇	三〇
1 宮廷・公家の歌壇 (1) — 二条家の断絶	三〇
2 宮廷・公家の歌壇 (2) — 飛鳥井雅縁(宋雅)	三三
3 宮廷・公家の歌壇 (3) — 公家歌人 付・武家歌人	三四
4 伏見殿歌会	三七
5 今川了俊と冷泉家の動向	四〇
要約	四五
第二章 応永中期の歌壇	四七
1 冷泉為尹 (1)	四七
2 二条派の動向と了俊「二言抄」の成立	四八
3 応永十四、五年の歌壇 — 九十番歌合など	五一
4 後小松院歌壇	五五
目次	三

5	冷泉為尹(2)と今川了俊	六
6	公家歌人	七
7	伏見殿歌会	六
	要 約	六
第三章 応永末期の歌壇		
1	宮廷・公家の歌壇	六
2	宋雅・雅世父子	七
3	地下歌人の進出	七
4	耕雲明魏	七
5	正 徹	七
6	武家歌人の輩出——満詮・盛見・道観	八
7	今川範政	八
8	伏見殿歌会	八
9	応永期における歌書の書写・著作	七
	要 約	一〇
第四章 永享期の歌壇		
1	永享前期の武家歌壇	一〇

2	永享前期の宮廷・公家歌壇	一〇五
3	雅世・堯孝と為之	一〇六
4	新統古今集の撰集	一一〇
5	冷泉家の衰退——為之・持和	一二四
6	永享後期の公武歌壇——法衆歌の盛行など	一二七
7	伏見殿歌会	一三一
8	新統古今集の撰進	一三三
9	永享期における正徹	一三八
10	永享期における歌書の書写・著作	一四四
	要 約	一五八
	第五章 文安・宝徳期の歌壇	一七〇
1	冷泉家の復興と前摂政家歌合	一七〇
2	宮廷・公家の歌壇(1)——宮廷歌会	一四一
3	宮廷・公家の歌壇(2)——詩歌合・歌合	一四四
4	公家の歌人	一四六
5	仙洞Ⅱ伏見殿歌会	一四九
6	武家歌壇	一五七

目次

六

7	堯孝と正徹	一七
	要約	一六
第六章 寛正期の歌壇		
1	諸大家の死と飛鳥井雅親	一七〇
2	宮廷における歌会・歌合	一七五
3	武家歌壇	一七九
4	地方歌人の動向	一八二
5	隠者歌人	一八七
6	勅撰和歌集撰集の企画	一九〇
	要約	一九三
第七章 文明前期の歌壇		
1	応仁元年より文明三年に至る京洛歌壇	一九五
2	文明四年より六年に至る京洛歌壇	一九八
3	文明七年より十年に至る京洛歌壇	二〇五
4	京洛における歌書の書写・編述	二一五
5	地方歌壇の動向と隠者歌人の活動(1)——妙椿・智閑・政弘・正広ら	二二一
6	地方歌壇の動向と隠者歌人の活動(2)——関東の人々	二二九

7	東常縁と宗祇	二二一
---	--------	-----

	要約	二四三
--	----	-----

	第八章 文明後期の歌壇	二四四
--	-------------	-----

1	宮廷歌会	二四四
---	------	-----

2	歌道師範家の動向 (1) — 飛鳥井家	二四九
---	---------------------	-----

3	歌道師範家の動向 (2) — 阿冷泉家	二五三
---	---------------------	-----

4	公家歌人 — 兼良・親長・実隆・基綱ら	二五九
---	---------------------	-----

5	宮廷・公家における歌書の書写・編述	二六八
---	-------------------	-----

6	足利義尚を中心とする幕府歌壇	二七一
---	----------------	-----

7	義尚の和歌撰集 付・近江出陣	二八三
---	----------------	-----

8	義政及び武家歌人 — 宗伊以下	二八七
---	-----------------	-----

9	地方歌壇の動向 (1)	二九五
---	-------------	-----

10	地方歌壇の動向 (2)	三〇六
----	-------------	-----

11	隠者歌人の活躍 — 宗祇、堯孝の問流・正徹の問流	三二〇
----	--------------------------	-----

	要約	三二七
--	----	-----

	追記	三三〇
--	----	-----

	付録	三七七
--	----	-----

目次

八

堯孝・東常縁年譜	三九
室町前期私家集伝本書目	三七
各家・各派系図	三三
あとがき	四〇
索引	四二

再版（追加部分）目次

補注	四二
補説	四七
一 応永期	五〇
二 永享期	五四
三 文字・宝徳・寛正期	五二
四 文明期	五八
室町前期歌書伝本書目稿	五五
索引	六一
あとがき（補記を兼ねて）	六三

序 章

一 の 1

承久の乱の後、蹴鞠の庇護者としての順徳院を失つた為家は、父定家の歌の業を継承すべく決意を新たにして有名な為家卿千首を詠じた。そしてこの後、定家の深甚なる配慮の許に、為家の、歌壇における新しき指導者としての地位は確立したのであつた。

この後の鎌倉時代歌壇は、かくして歌壇の軸となつた歌道師範家御子左家と、その嫡流である二条家とに対する反抗の歴史によつてつづられていたとさえ言い得る。

為家による歌壇の統一は、極めて短期間に終つた。定家の歿後わずか五年目の寛元四年（一二四六）十二月、かねて為家と歌論の上で微妙な違和があり、その個性も頗る対蹠的であつた弁入道真観（葉室光俊）は、定家子飼いの弟子であつた六条家の連性（知家）と心を併せて為家に反旗を翻したのであつた（源承和歌口伝・春日若宮歌合）。この真観一派は、真観の弟である後嵯峨院仙洞の執権を承つた定嗣や、一族の顯朝らを通して後嵯峨院歌壇の下で一大グループを結集して歌壇を攪乱した。宝治歌合における為家判を不服とした連性陳状や、建長三年（一二五一）の歌合における連性と、為家の従兄西園寺実氏との論争（判詞及び延慶両卿訴陳状中の記事）などがその好例であるが、その年とにかく為家は続後撰集を独撰した。真観はこれに対して難続後撰を記した（井蛙抄）。

この後、真観一派は建長八年基家百首歌合（書陵部蔵）等の派手な催しを次々と行い、文応以後、真観は関東に下つて將軍宗尊親王の歌道師範として出仕した（竊河上・吾妻鏡）。当時関東歌壇の賑わいは大変なもので、飛鳥井教定・雅有父子以下の関東祇候の廷臣、將軍や北条一族以下の武士、僧侶らは常に歌会を催し、東撰和歌六帖が撰ばれ、弘長元年には百五十番歌合（和中世歌合集所収）が行われ、真観はこの歌壇に指導者として臨んだ。

已に正元元年（一二五九）には京都で為家が再び勅撰集を撰進すべく命ぜられていたが、弘長二年（一二六二）真観は関東の勢威を背景に、同じグループの行家（正嘉二年歿した知家の男）・九条基家・衣笠家良と共に勅撰集の撰者に割込み、將軍の命と称して撰集の業を壟断した。為家は怒り嘆いて業から殆ど手を引いた状態になり、真観一派の傍若無人の振舞の内に続古今集が文永二年（一二六五）に成立したのであつた。所が、翌三年、突如として起つた鎌倉政変によつて宗尊は將軍の座から滑り、その勢威を笠に着た真観も忽ちに失脚して院參を停止せしめられ（源承和歌口伝）、さしも勢威を振つた真観・六条家の連携勢力も急速に崩壊したのであつた。

補 記

中世歌壇は已に堀河院歌壇の崩壊を機として萌芽した、というのが橋本不美男氏の所説である。即ちその前後から宮廷歌壇は、宮廷行事の強い桎梏を徐々に脱して文芸サロンとしての色彩を強く持つて来て、俊頼・基俊・顯季の子孫や弟子による専門歌壇というべきものが出現し、歌壇に質的な変化が起つた、というのである。右に關しては

「院政期歌壇の一考察」（書陵部紀要10）

「殿上人源俊頼」（文学・語学20）

を参照されたい。傾聴すべき所説で、中世歌壇史の記述が将来行われる場合は、院政期歌壇を無視すべきではないと思う。

かくして生起した専門歌壇が行きついた形は、千載・新古今の絢爛たる曲折をへて、為家の家業継承による御子左一家の歌壇統一であろう。その意味で、故風巻景次郎の「藤原為家の家業継承の意義」は名論たる価値を今に失わない。一応それを目安として、この序章では承久以後の歌壇を略述してみようと思つたのである。もとより本格的な中世歌壇史の敘述ならば、院政期から筆を起すべきであらうし、また建保期歌壇の性格などは、承久以後の歌壇に直接続くものである、という見解も強いので、当然その敘述を行わねばならぬのであるが、ここでは本章に至る経過説明を主とした為、また俊成・定家及び新古今前後の歌壇に関する論は頗る多い事とて、一応省略に従つたのである。

新古今前後の歌壇・歌人伝の研究論文は一々挙げきれない程であるが、最近の研究趨勢は、『文学・語学』18所載の浜口博章氏執筆による中世文学研究の現段階と問題点——和歌の項を参照されたい。

建保期歌壇前後を扱つたものに藤平春男氏の二論がある。

「建保期の歌壇について」(国文学研究20)

「新勅撰和歌集の歌風をめぐって」(和歌文学研究9)

なお新勅撰集に関しては戦前に石田吉貞氏の勝れた二論があり(「新勅撰集の成立について」・「新勅撰集の定家的性格」)、最近、樋口芳麻呂氏 노력によつて伝本の研究も長足の進歩を見せた。

為家・真観対立前後の京・鎌倉歌壇を扱った論としては左を参照されたい。

安井久善氏「右大弁光俊放」(『中世私撰和歌集放』所収)

拙稿「真観をめぐる」(和歌文学研究4)

久保田淳氏「為家と光俊」(国語と国文学昭三三5)

山岸徳平氏「宗尊親王と其の和歌」(同右昭二二12)

石田吉貞氏「宇都宮歌壇とその性格」(同右)

樋口芳麻呂氏「続後撰目錄序残欠とその意義」(国語と国文学昭三四9)

久保田淳氏「藤原信実試論」(和歌文学研究5)

石田吉貞氏「鎌倉文学圈」(国語と国文学昭二九10)

久保田淳氏「順教房寂恵について」(同右昭三三11)

家郷隆文氏「続古今和歌集研究」(国語国文研究10)

この時期に成立した幾つかの私撰集についての研究も盛んであるが、主な論文を掲げておく。

安井久善氏「中世私撰和歌集放」(正統)

安井久善氏『本秋風和歌集とその研究』

深谷礼子氏「万代和歌集作者別索引」(愛知学芸大国語国文学報10)

樋口芳麻呂氏「雲葉和歌集卷第十一以降の和歌について」(同右12)

一 の 2

文永三年(一二六六)真観の失脚に伴って、再び歌壇の覇者となつたのは御子左家の為家・為氏父子であつた。為